大学のある街

今出川にわたる風 8

母よ これが私の生です

栃木県那須地方ではこの正月、40㌢の積雪があった。那須塩原市の高野アイ(83)の家には子や孫らが集い、掘りごたつを囲んだ。娘の悦子が家族と最後のお正月を過ごしたときから37年がたった。庭に面した和室に、高校卒業の日に友だちの家の縁側でギターをつまびく悦子の写真が飾られている。

高野悦子は立命館大学文学部史学科の3回生だった1969年6月、円町の下宿のそばの国鉄山陰線踏切で貨物列車に飛び込んで命を絶った。1月2日の20歳の誕生日から死の直前までつづった日記「二十歳の原点」(新潮社)は、71年の初版から続編もあわせて300万部以上が読まれている。

〈「独りであること」、「未熟であること」、これが私の二十歳の原点である〉(69年1月15日、成人の日)

学生運動が盛んなころだ。今出川通と丸太町通の間、御所の東にあった立命館大でも校舎にバリケードが張られた。悦子はヘルメットをかぶり、機動隊にたたかれながら運動に加わった。

〈決意。私はスキー道具一式を売却し、その金で、『資本論』およびその他の本を買うことを、ここに誓います〉(5月8日)

自殺の理由は明らかではない。学生運動、友情、恋愛、アルバイト……。様々に悩み、死を選んだ。

悦子が自転車のかごに詩集を入れて走った今出川通の風景は大きく変わった。市電はなくなり、81年に立命館は移転した。大学にバリケードはなく、梨木神社に待機する機動隊もない。

それでも、悦子の日記はいまの若者の心をつかむ。立命館大学経営学部3回生の今関敦子(22)は、こんな一節に深く共感した。

〈父と母の面前で煙草を吸って、両親と対決することができるだろうか。かみそりで指先を切るよりも(中略)それは幾十倍の勇気がいることだろう〉(2月7日)

敦子の母はがんを患い、激しい投薬治療の副作用に苦しみながら、病院の検査技師として働く。母を尊敬し、自分もしっかりしなければとの思いは年とともに強くなり、20歳を前に、母に悩みを話すことができなくなった。

敦子も日に数本たばこを吸う。目の前で吸った時に、母がどういう顔をするのか、わからなくて怖い。

二十歳の原点

68年の春、アイは奈良の病院に検査入院した。悦子は「引っ越したばかりで片づけも済まないのに」とふくれながらも、毎日通ってきて一緒に近くを散歩した。69年の正月に帰省した時には家族とスキーを楽しんだ。

〈家族と共に生活していると、何も考えずにいても楽しく過せるのだ。けれども、母は、父は(中略)どれだけ私を知っているのであろうか〉(1月2日)

4月、遊びにきたアイを京都駅で迎えた悦子は「私は忙しい。一緒には回れないから」と言った。悦子が二条城のそばでタクシーを降りたとき、アイは悦子が急にどこかへ行ってしまったような気がして泣いた。

悦子は学生運動にのめりこんでいた。その変化に驚いた家族が5月30日、東京に下宿していた姉の家に集まり、運動から抜けるよう説得した。

〈決裂して飛び出す。(中略)非常に疲れている。次第に自分に自信をなくしている〉(5月31日)

アイは、何でもいけない、いけないと言ったことを悔やんだ。6月17日、一人で悦子の下宿を訪れた。「あんたが正しいと思うならやりなさい。ただし体には気を付けて」。悦子は安心したような表情を見せた。それは確かに自分の知っている悦子の顔だった。

19日、2人で河原町通に買い物に出た。悦子がねだるので小さな店で薄茶色のワンピースと靴を買ってあげた。「バッグもほしい」と言われたが、帰りの電車がせまっていたので3千円を渡した。京都駅の改札口まで見送りに来た悦子が「じゃあね、さようなら」と笑顔で小さく手を振った時、「一緒に那須野へ帰ろう」という言葉が出かかった。しかし、悦子の考えを認めると決めたんだとのみ込んだ。

悦子が亡くなった6月24日、下宿の机に10冊ほどのノートが積まれているのを見つけた。初めて知る娘の心の叫びだった。京都での悦子の生活を知る人を訪ねて回り、悦子が歩いたであろう道もたどるうち、「どうしてこんなことしたの？　親の悲しみがわからんの？」という遺影への問いかけは、「あんたが一番苦しかったよね。気づいてあげられなくてごめん」という問いに変わった。死の直前、小さい頃から、わがまま一つ言わなかった悦子が子どもらしくねだってくれた。あのとき栃木に連れ帰るべきだっただろうか――。いまも自問を続ける。

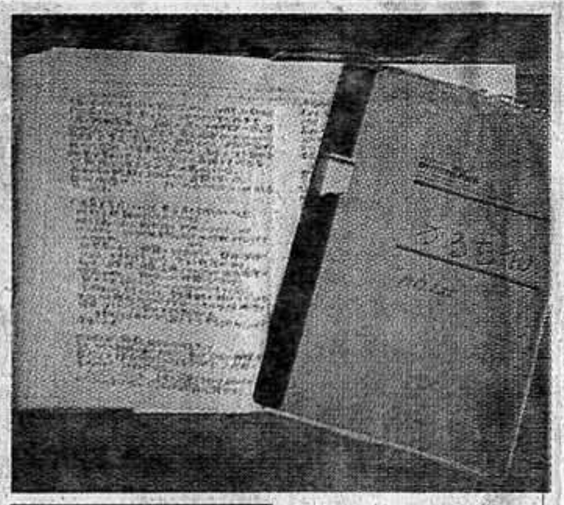
若者の苦しみ 親は今も見守り

悦子は「演技者でいよう」と繰り返し記した。敦子にはその気持ちがわかる。自分も周囲の期待にこたえ、迷惑をかけない子でいたいと思ってきた。

浪人時代、数学の成績が伸びずに悩み、ついに1月、あこがれた建築学科の受験をあきらめた。それでも心配をかけまいと母には笑顔で伝えた。母は何も言わなかったが、次の日、大好きなブドウを山盛りにして部屋に置いておいてくれた。気持ちが楽になり、ぼろぼろ泣いた。自分はなかなか素直になれないが、母が見守ってくれていることはよくわかっている。今度こそ、つらくなったら母に話そうと思う。

アイの元には、「二十歳の原点」を読んだ人たちから手紙が届き続けている。アイは出来る限り返事を書いてきた。家に訪ねて来る人もいた。大学を辞めてしまおうかと迷う学生に、アイは「頑張って勉強して大学に入ったんでしょう？　どうして頑張れたか、もう一度思い出して、どうしてそこにいるのかを考えてごらんなさい」と諭した。悦子から打ち明けられることのなかった悩みを聞くことが自分の役目だと思っている。

(敬称略)



下高野悦子さん上悦子さんの日記左悦子さんは河原町通を今出川通から下がった所にあったジャズ喫茶に通い、ウイスキーを飲んでは気を紛らわせた。今は駐車場になっている＝上京区で